

『教行信証』の研究 全四巻の発刊に想う

— 聖教は句面のごとくこころうべし —

佐々木恵精

(ささき えしやう)

親鸞聖人七百五十回大遠忌法要が勤修され円成して一年余りです。法要のご縁にお遇いできたことは大きな感動でした。今、新たな一步を踏み出していますが、この大遠忌の記念事業の一つとして、当研究所では、「親鸞教義の研究」と題して、聖人畢生の名著「顕浄土真実教行証文類」(以下「教行信証」「本典」と略称)を研鑽し解説論集をまとめる事業に取り組みました。研究部会で「本典」に関する研究発表、討論を繰り返して、その成果を昨年八月に『教行信証』の研究 全四巻として発刊しました。『教行信証』は、立教開宗の根本聖典であり、聖人が浄土真宗の根本たる「本願の大道」を示されたもので、その解説(第一巻)を現在の宗門を代表する勤学和上方に執筆いただき、その背景と展開について論集を別冊(第二巻)にまとめた、これまでにない画期的な解説論集となりました。

変化の激しい現代社会にある私どもは、社会の変動に振り回されるばかりですが、み教えに出遇ったものとして、激動の時代だからこそ、真実なる『教行信証』のおこころを体して現代社会の諸課題に対応しなければなりません。『蓮如上人御一代記聞書』に、「聖教をばくれくれと仰せられ候ふ。……聖教は句面のごとくこころうべし」と示されるように、聖教の真意を正しくしっかりと受け止めてこそ、現代を生きる道が開かれるでしょう。

本書には、聖人に近い時期の書写本、本願寺蔵『教行信証』の縮刷本を第三、四巻に収めています。この縮刷本に触れながら拝読することによって、聖人のおこころにも触れられることでしよう。時代や社会を切り拓いていくためにも、本書を座右にして更なる研鑽を積みみたいものです。(浄土真宗本願寺派総合研究所長)